

現代社会における青少年について

場 知 賀 礼 文

日曜日や祭日に都会へでかけると、商店街とかショッピングセンターは大勢の人で賑っており、親づれの小学生や仲間同志のティーンエージャーを多くみかける。青少年たちは何を求めて街に行くのであろうか。各個人の目的は別にして、共通の目標は休みを楽しもうということにあるらしい。街頭で十代の少年を観察すると、学校の制服を着ている姿はみられず、彼らはふだん着か流行かの服を着ており、ヴァライティに富んでおり、カラフルである。少女のスカートはロングがはやっているようだが、ひざをカバーするもの、半ズボンやパンツ・スタイル、ミニなども結構いる。制服を着用していないので、年齢は想像しにくい。この若い人達の顔をみると暗い印象を受けない。男の子のようにポケット手を入れて、皆が楽しそうで、陽気にみえる。

確かに、現在街でみかける青少年は明るいが、彼らのすべてがそうであるとはいえない。特に十数年も前から彼らを巡る問題が多くなり、喫煙、万引、シンナー遊び、校内暴力まで問題が拡大し、最近ではいじめの結果とみられるロー・ティーンの自殺事件が相続いて起こっている。いじめは現代社会の大きい問題になってきた。

私は本稿で現代社会における青少年の位置づけとアイデンティティについて社会学の立場から考えてみたい。青少年の研究は、教育の観点から非行などの問題を取りあげるものが多い。社会病理学のアプローチもいくらかされているが、社会学の基礎的の視点から行なわれる研究は少ない。筆者は、以前、後者のアプローチ

から現代文化の精神的な方向づけと逸脱行為の関連性を考察し、非行問題の社会的背景をいくらか明らかにしようと試みた¹⁾。その内容を要約すると、次のようになる。現代資本主義社会は競争社会である。それは青少年には多大な我慢と努力を要求する一方、文化の領域が拡大し、余暇活動が増大した結果、快楽主義を生み、技術・経済的領域でかつての禁欲的倫理と矛盾するようになった。しかも、現代の大衆文化はテレビや他のマスメディアにみられるように、非常に多様で、アイデンティティ形成に役立つ方向性あるいは規範性をもはや有さない。テレビ視聴の場合に典型的にみられるように、現代文化との接触は視覚を通して、受け身的であり、放送される内容は性や暴力を強調するプログラムが少なくないので、情に訴えることが多い。このような傾向は直接に非行と結び付かないが、現代文化は、全般的にみると、中性的な生活環境に他ならない。とはいえ、競争社会で勝つ努力が大いに要求するという点では、特にテレビ視聴で何らかの指導も受けない青少年にはややマイナス的な影響を及ぼすと考えられる。

以上の社会背景をふまえて、本稿では中学生から大学生までの青少年の現代社会を検討するとともに彼らの意識を分析したい。ここでいう意識とは世論調査などで取りあつかわれる個人の個別的意識ではなく、主として若い世代の集合的意識を意味している。方法論的にいえば、ピーター・バーガーのアプローチ、すなわちある一定の社会環境におかれている行為主体が行為を通して経験する社会関係、またそこから

生じる日常的意識を分析する知識社会的なアプローチを取ることとする。

青少年の社会関係は二つの側面に区別することができる。一つは、彼らの社会化にみられる基本的な社会関係と、もう一つは彼らの日常的行動にみられる具体的な社会関係である。意識のとらえ方について、バーガーは次のように示唆する。「すべての社会的現実には意識という不可欠な構成要素が包含されている。日常生活の意識とは、人のありきたりの出来事や、他人の生活上の出会いをうまく切りぬけさせてくれるような意味の網目をなしているのである」³⁾。ここで意味することは、人がおかれている社会的現実と、人が抱く意識の間に通路が存在するという点である。意識が行動の方向づけとして作用するという一方的な関係にしか触れられず、意識がどのように発生し成立するかはわからない。意識の成立は生理的かつ心理的な、複雑な過程であると考えられるが、社会的にみると、行為の制度化過程から行為そのものが社会制度と意識との媒介の作用を果すと考えられる⁴⁾。個人が「何を」意識するかは、おかれている環境に規定される。また意識の対象について「どのように」意識するかは、個人の行為とその経験を通じて形成される⁵⁾。ここではそれ以上、社会制度と行為と意識の関係について言及することはできないが、行為を含んだ社会関係の分析によって社会成員の潜在的かつ集合的意識をつかむことができると思う。

青少年の社会関係の記述とその分析に入る前に、人間本来の相互作用のパターンをみることは、方法論的にも分析的にも重要だと思う。なぜかといえば、社会における青少年の位置づけの研究は彼らの社会的行為の分析なのであるが、結果的にその行為を評価することにもなるからである。評価をせざるを得ないならば、そ

の規準を予め明らかにした方がよい。さらに説明を加えると、例えば、ある逸脱行為に言及した時、何が通常の行為か、何が逸脱行為なのかを弁別する規準が望ましい。一般的に規則や法律に反する行為は逸脱とされる。規則を破ったという規準は明確であるとはいえ、それだけでは行為主体が蒙る影響は明らかにならない。相手を対象にする社会的行為の影響は、たとえば母親が幼児に対して行なう行動によくみられる。生まれたばかりの新生児は極めて未熟である。知能と意識は他者との相互作用を通じて、社会的環境と接しながら発展していくが、その過程においてしばらくの間乳児の意志は作用しない。生まれる前に社会的・文化的響影を受けていないので、いわば白紙状態ではじまるこの発展過程は一種の自然現象とみてもよい。乳児は「自然に」反応しながら、他者に対して一定の態度を取る。幼児はこの相互作用の結果、自分についても、他者についても不信感のない子供として育ち、健全な社会的人間として伸びることができるなら、その発展過程にみられる相互作用は正常なものと呼びたい。逆に、そういった健全な発展を妨げるすべての行為——他者または自分による行為——は、逸脱行為とはいえないにしても、正常性を欠く行為といえるであろう。たとえば、家庭あるいは学校で、重大な規則を破った結果、児童が非難され、制裁を受け、それによってショックを経験する場合を想像してみよう。そこでは、分析的にみれば、健全な発達は一時的に停止する。もし児童は次の瞬間に「悪かった」と反省すれば、正常な発展は継続する。もし反対に、十分に反省できない場合、二の舞を演じて、人を困らせるような行為を繰り返し、規則を無視する行動を取り、さらに他者に非難されると同時に他者に対する不信感を抱くようになり、その傾向は益々

深刻になっていく。この場合、パーソナリティは健全に成長せず、非行に傾くようになるであらう⁹⁾。そこで、次に人間本来の相互作用とは何か、これを自我発達の過程においてとらえてみよう。

自我発達の過程

人間の発展過程の始まりを見ると、もちろん主体の意志は作用しない。生まれてまもない新生児は無力そのものであり、一人で生きられない状態におかれている。出産したとたんに助産婦は赤ちゃんのおしりを軽くたたき、泣き声を出させて呼吸をはじめさせると聞いたが、このことは非常に象徴的な行為でもある。子供が正常に育つために、幼児期にも児童期にも長い年月の間に何回も、文字通りまた比喩的にもおしりをたたかれて社会化される。集団生活に適応できる人間として教育されるためだけでなく、精神的にも人間として育つために、相手に与えられる刺激が不可欠なのである。知能の発達には刺激を与えるのが当然のことだと、よくいわれているが、乳児の知能を空白のテープにたとえると、このテープは生まれて間もなく流れだして、親と他の相手の刺激を受け、さまざまな音や映像や意味を記録していく。逆にたとえ他者から離れて生き残ることができても、そのような状況下の人間は人間のことばを記録することができないので、人間として育たないのである。ここで、古代の歴史家ヘロドトスがエジプト記で書き残した面白い事例を思い出す。古代エジプト人は自分の民族が一番古いと思っていたが、ある国王はその話しを確認するために部下に命じて二人の幼児を小屋に孤立させ、直接に接触せず、絶対にことばをかけずに世話をするように命じた。二年後、小屋のなかへ入ると、幼児は両手を出して「ペーコス」と言った

という。「ペーコス」ということばはエジプト語ではない。調べたところ、この語はフリジア語で「パン」を意味するものだとわかったので、国王をはじめエジプト人はフリジア民族の方が起源が古いと認めたのである。しかし、この話は絶対にありえない話である。エジプトの子供はフリジア人に育てられない限り、フリジア語を覚えられない。ヘロドトスは次のように修正すべきであろう。「二年・三年後、小屋のなかへ入ると、幼児は一言も喋らなかった」と。子供は他者との接触を通して言語、話法などを習うと同時に、あいさつの仕方、礼儀作法、あらゆる社会関係や文化を少しずつ覚えていく。

ところで、自我の発展過程に関連して、人間として習うもののうち何が一番基本的であらうか。言い換えると、社会生活の土台になるものとは何か。それは言語や礼儀作法などではなく、社会生活の種々のルールでもない。最も基本的なのは相手への信頼と自尊心である。相手と自分自身に対するこの二つの態度を覚えないと正常な人間としては育たない、また人間関係やコミュニケーションが困難になり、場合によっては不可能になる。E. エリクソンが指摘するように、乳児の最初の社会的行為は、たとえば母親が隣の部屋に行き、一時的に姿を消したとき、赤ちゃんが不安も怒りもなく、落ち着いていて待つてくれるということである⁶⁾。この行為のなかには、乳児が既に母を信頼しているということが含まれている。そこに母親の乳児への世話の心理的・社会的意味がある。もう少し具体的にみると、母は赤ちゃんの世話をしながら、ことばを全くわからない赤ちゃんにいろいろなことを話しかける。赤ちゃんはそれに対して反応し、最初は大抵手足を動かすだけであるが、しばらく時間がたつと、赤ちゃんは機嫌のよい時には笑い顔をもって反応し、喜んでい

ることを表わす。赤ちゃんの笑顔はお母さんから受けた世話に対するもので、お母さんも喜びがわいてくる。このように、この行動は既に立派な相互作用だといえる。もし赤ちゃんがちゃんと面倒をみてもらわないと、不満であるだけではなく、特にそういう不満が連続して生じるならば、相手への信頼が生まれてこなくなるのである。

もう一つの重要な点は、乳児が自尊心をもつことである。体に力がつくにつれて、おもちゃをつかむようになり、コップなどを自分の手で持つように教えられるようになる。やがて自分の足で立つこと、少しずつ足を出して歩くこと、ことばを言うてみること、テーブルで一人で食えることなど、さまざまなことを勧められ教えられる。こういった行為は何千回、何万回となく、毎日繰り返して行なわれ、幼児は愛情をこめた訓練を受けるなかで、次々にいろいろな活動をマスターしていく。そして、特に自分というものが大切にされるので、自己の価値を信じて、自分に対する自信と自尊心を持つようになる。この二つのこと、つまり、相手を信頼することと、自尊心を抱くことは自立への不可欠の要素である。

反対に、乳児や幼児が十分な世話を受けず、十分な刺激を受けないならば、発達が遅れるのみならず、パーソナリティーにまで影響が及ぶ。一番不幸な場合、人に対する信頼感も自分への自信もなく、人々から孤立してしまう。そういう人には正常な人間関係ができなくなり、友情や愛情の実感もわいてこないのである。

この自我の形成過程にはコミュニケーションの基本的なパターンがみられ、心と心のコミュニケーションのはたらきが示されるのではないかと思う。心と心とのコミュニケーションとは、やはり相手への信頼と自分自身に対する自

尊心という二つの態度を可能にし、それを深めるコミュニケーションである。そのメカニズムあるいはそのはたらきの重要なポイントは相互の認知、つまり相互に認め合い、先ほど言及した相手の真の欲求や期待に応じることによって補足し合うことだと考えられる。比喩的にいうと、人間の心を車のエンジンにたとえれば、プラグに電気の刺激を与えて起こしてスパークをよせるのは相手を相手としてみとめる他者である。乳児や幼児の場合には、非常に明らかであるが、そういった子供は自ら必要なスパークを起こすことが全くできない。小学校の児童もほとんどできないであろう。それ以上の子供はどうであろうか。思春期のころから心のモーターは大体において自動化してきて、20歳になった頃には完全に自動的に動いているようである。青年たちはそういう意識をもっているし、周囲の社会も自立を期待している。しかし人間は生活のあらゆるところで他者に頼って依存しているので、自立は錯覚にすぎない。これこそが人間のパラドクスではないだろうか。子供が自立に向かって成長するのは当然であり必然なことでもあるが、前述した理由で独立宣言は一生できない。今一つの理由は、自我の内面は完全に自分のものにならないということにある。各個人は、自分の人間性あるいは自分のパーソナリティーの建物を全部借りてきた建築材で作って、借りたマテリアルで維持していき、しかも直接的ないし間接的に人の協力や社会制度の力を得て作り続ける訳である。

自我はそのように成長していくけれども、自由意志や優越感などがあるゆえに、ふだん自立意識が強力に作用し、人への依存を認めようとしない。当面のコンテキストで人間の幸福についていえば、それはうまく自立し、うまく依存する、といった二つのバランスにかかっている

のではないと思う。このことは自立に向って育っていく若い人達には一番わかりにくいかも知れない。

このようにみると、自我の形成と発展が必然的に相互作用を通して実現されるので、人間は「本質的に」社会的存在になる。本質的という語に鍵かっこをつけたのは、この用語は経験科学としての社会学には馴染まないからである。たとえ社会学的に人間について定義を下すことが許されるならば、簡単に人間イコール関係、あるいは結ばれる諸関係の総体であるといえよう。

次に、青少年の主な社会関係の分析に移りたい。

青少年の社会関係

青少年の社会関係の分析によって彼らのアイデンティティと現代社会における位置づけを明確にするのがこの小論の目標であった。その関係を三つの角度から考えてみたい。すなわち、(1)伝統的社会と現代社会における青少年のおかれている状態の比較、(2)青少年の将来の計画あるいはライフ・プラン、(3)現代社会における青少年と大人の社会関係の比較という三つの視点からである。

第一に、青少年のおかれている状態は伝統的社会と現代社会とでは大いに異なる。まず、伝統的社会における青年期、社会学的にみれば、青年期は存在しなかったとさえいえる⁷⁾。例えば、江戸時代では武士階級の子供は元服式で大人と見なされたが、他の階級の場合はどうであったのだろうか。前近代社会については筆者は西欧の状況を多少知っているので西ヨーロッパの事例をあげたい。今世紀のはじめ頃のヨーロッパの青年たちは12歳のころから働きに出かけた。19世紀に溯ると、小作人や産業労働者の子供は7歳のころから畑で働いたり、工場へ働

きに出かけたりした。それにかかわる問題をマルクスが取りあげたことは周知の通りである。いずれにせよ、伝統的社会においては子供は青年期の前後の時から大人と同じ社会関係を持つようになっていた。

一方自我形成についていうと、その過程は普遍的なもので変わらない。異なるのは社会化の過程である。社会化とは、個人が社会の諸々の事柄を内面化することを言い、もしくは社会が個人の心の内に内在化することを言う。バーガーは社会化による内在化の作用を次のようにみている。「内在化は同一化があってはじめて可能になる。意味ある他者あるいは重要な他者との同一化によって子供は、自分自身が何であるかを知ることができるとともに、主観的に首尾一貫し、納得しうるアイデンティティを獲得することができるようになる」⁸⁾。この「他者との同一化」は特に第一次的社会と呼ばれる、幼児期の社会化の特徴だといえる。子供は自分がまだ判断できないうちに、親が代表するすべての社会的な意味を吸収し、自分のものにするということである。結果的にいうと、「社会、アイデンティティ、それに現実の三者は、同じ内在化過程のなかで主観的に結晶化されるのである」⁹⁾。

伝統的社会と現代社会における社会化において大いに異なるのは、もちろん社会化の内容であり文化である。例えば、日本でも欧米でも、家庭内の青少年たちの部屋をみると、壁は雑誌などから切り取った若い歌手の写真、オートバイ、車のポスターなどでいっぱい飾られている。音楽の場合、彼らが聞くのは、多くの大人にとって騒音にすぎないともいえる、ロックのような音楽である。また、毎日のテレビ視聴による相違は極めて大きいと考えられる。さらにまた、現在の平等的人間関係を考えると、伝統的社会との相違はさらに拡がる。家族は核家族

に変化し、仕事場から離れ、成員の数が少なくなり、数世代間の関係から親子だけの関係が圧倒的に多くなった。家庭内で接する人の数が減少したのに対して、家族外で接する人の数が極めて増大し、テレビの媒介による数は夥しいものになる。

次に最も大きい相違点は第二次的社会化と関連する。バーガーの定義によると、「第二次的社会化とは、制度的下位世界が内在化される過程である…[それは]直接にしろ間接にしろ、分業に基礎づけられた役割の特殊な知識の獲得である」¹⁰⁾。伝統的社会の子供は、上述したように、児童期あるいは青年期において働きはじめ、早い時期に大人の社会的役割を取得する。しかも多くの場合、その成熟過程を指導するのは親か身近にいる人々、たとえば村人である。このような状況のなかで、第一次的社会化にみられる感情的な同一化が、第二次的社会化のときにもみられる。つまり、社会における役割の取得は「自然に」進む。社会化される個人は職業を選択せず、ある職業自体を判断できないうちに、それに就くのである。そこで内面化されるもの、たとえば、幼いころから覚えたものの見方や、礼儀作法、親孝行などは、文字どおり身につけており、完全にと言っていいほど内面化されるものである。大人になっても、このような事柄に対しては疑問が起こらず、その結果として成立したアイデンティティにも危機は起こらない。毎日の生活が苦勞として、あるいは苦しいものとして経験されても、集団に所属し、集団に支えられ、その決まった分野で一人前になるのが明白な目標であり、それに対しては迷いが起こらないのである。

このように順調に進む役割の社会化は現在も可能なのであろうか。大半の青年は18歳あるいは22～3歳まで教育を受ける。この長期間の教

育のために大人の世界における役割の取得はおくれる。教育は、特に中学校の段階から個人のニーズよりも社会のニーズを満たすために非常に合理的に進むが、それは競争の世界である。それ故に、生徒たちの本務である勉学の水準では仲間意識が形成されにくく、また社会の代表者でもある教師に対して同一化することも困難になると思われる。後者の原因には学校の教師が戦前ほど権威を持てない存在になったということもあげられよう。

第二の観点に移ると、伝統的社会とさらに異なるのは、現在の青少年が将来やりたいと思う仕事の領域を自ら選択し、また自分の力で将来の地位を獲得しなければならないということである。将来の計画あるいはライフ・プランは、バーガーによれば「アイデンティティの第一次の源泉となる」¹¹⁾。実際にまだ働かなくても、社会が曲がり角にあると意識し、将来の夢を胸に抱く青年たちは、毎日頑張れるようにその夢から強力な動機を得ることができる。また極端なことを言うが、夢や目的意識を全く持たない青年にとっては現在の勉強生活が面白いはずはないし、将来の生活を楽しみにすることもできないはずである。

ところが、今日若い人たちに夢を抱かせるのがむづかしい時代になったと思われる。自立に向かって成長していくとはいえ、本来未熟なまま将来の職業を選択しなければならないのは、多くの青少年にはいわば余儀ない宿命というのか、かつてない試練として経験されると想像できよう。一方では、職業構造が多様化し、職業が非常にふえている。経済、政治、文化のそれぞれの世界にも、スポーツの世界にも高い地位が多くあり、それに就くと名誉もお金も手に入る。現在は、民主主義的社会なので、原則としてはすべての人に同じチャンスが与えられるは

ずである。努力さえすれば、だれでもそういった地位の志願者になりうる。しかし他方では、その志願者が多すぎて、非常な努力をしない限り、どの世界でも高い地位に就く夢は空中楼閣にすぎないので、反対にねたみの対象にもなりかねない。現在日本の経済情勢ではほとんどの青年たちは就職できるから、情況が悪いとはいえないにしても、大半の若者はサラリーマンのような、内容の推測しにくい、あるいは特殊性のない勤め口しか探せない。そこで選択肢が実は狭く、確かに夢を持ちにくくなったといえる。

第三に、現代社会における大人と青少年の社会関係を比較すると、現在、社会における青少年の位置づけは確固たるものではないことが、さらに明らかになる。多くの社会関係は仕事と家庭をもつことによるものである。人は会社に勤め、あるいは自営業の仕事をして、人間関係の網の目に入る。生計をたてるために必要であるがゆえに、それを勝手にやめることはできない。家庭も、特に子供のある家庭は通常堅固な絆を与えてくれる。子供を通して学校との関係もあり、また薄くなったとはいえ、地域社会での近隣関係も存在している。仕事による給料あるいは収入で生計を立てられるだけではなく、収入は自分の努力の成果であるので、それだけでも生活を楽しむことができる。30歳にもなれば、ローンを利用し、マンションを購入するか、我が家を建てる人が少なくない。毎日の生活で電気、電話、ガス、新聞、テレビ視聴料などの請求書もしくは銀行払いの通知書が規則的に送られてくる。納税の通知書もそうである。そういうものを納めたり、受け取ったりするのは、生活の楽しみだとは言いがたいが、それもすべて社会関係であり、大人の意識を形成し維持するものである。

このように、人はそれぞれ異なった責任を伴

う社会関係の結果、社会的に、あるいは事実上の大人になる。自分自身は毎日続くドラマの主人公であって、大きな問題が起らない限り人並みに満足感を得て、安定した生活を送ることができる。社会学的にいうと、そういった人は固定化したアイデンティティを持っている。

中学生や高校生の場合はどうであろうか。青少年の社会関係は同じ意味を持っているであろうか。彼らは自立に向かっているのだから、家族による絆自体は、正常な家族の場合、弱められないとしても、自我を支える力がそれほど強くないと思われる。学校との関係になると、勉強が本業なのにも拘らず、成績のいい生徒でも、休みにもなれば、学校から解放されて大変喜ぶ。勉強の苦手な子供には学習は満足感を与えてくれるとは想像しにくい。もちろん学校は友達を見つける機会を与えてくれるし、スポーツやサークル活動の場を提供してくれるので、そういう施設としては自我を支えて大切な役割を果たしている。特に学習から十分な生きがいを得ない生徒には、仲間と思う存分に活動できるのがかけがえのないものとみてよからう。

スポーツ活動の場合、社会人は同じ魅力をもっていない。暇が少なく、体力の衰えも加わり、もちろんそのために、つまり健康維持のためにスポーツをやる必要があるといえるが、その活動から生きがいを期待する社会人が大勢いるとは思われない。

青少年と大人の精神構造の相違をさらに感じさせるのは次の事例である。15～16歳の、多くの青年がペンフレンドを求めて、会ったこともない、場合によっては外国の同世代の青年と熱心に文通する。全く見知らない人と手紙を交わすのは、年賀状をゆっくり書く時間さえ見つけるのに苦労する社会人にはかなりつらいはずである。大学生も新しい友達を求めたり、それを

大学生生活の楽しみにしたり、目標にしたりする。仕事や家庭、多くの社会関係をもつ大抵の大人にとって、今さら別の仲間を捜そうというようなことは頭に浮んでこないであろう。

以上でみてきたように、社会における青少年と大人の位置づけを比較すると、前者の社会関係の少なさと、暫定的性格がわかると同時に、前者の場合最も重要な、学校との関係の弱点、つまり、学習活動から得られる自我への支えの乏しさがあると思われる。

現代社会と伝統的社会を比較すると、現在青少年の第二次的社会化の延長に伴う問題点と将来計画にかんする迷いが明らかになる。さらにまた文化と人間関係における相違が浮きあがる。広義の文化にかんしていえば、学校で頻繁に行なわれる、多い種類のスポーツやサークル活動、家庭で毎日のように接するテレビの映像文化、鑑賞される音楽、漫画などを挙げることができる。若い世代が現在特権的に享受できるこのような文化はぼう大なものになっている。

人間関係についていえば、青少年と大人との距離は民主化や核家族化の結果、心理的に縮小したのに対して、社会的に遠くなったと思われる。社会的な距離が遠くなったのは、再三述べたように、大人の世界での役割の取得が延期され、その世界にほとんどつながりをもたないしさらに長い青年期の誕生によるものである。

以上のように青少年の社会関係をみると、彼らのアイデンティティをどのように理解すればよいのか。それを当次の結論として述べたい。

青少年のアイデンティティ

アイデンティティという用語はここでは自我意識、つまり「特定の社会状況における具体的な自我体験」¹²⁾、さらに換言すると、個人が社会関係を通して形成する自分自身についての意識

を意味する。従って、共通の社会関係から、ある程度共通の自我意識ないし集合的アイデンティティが成立すると思われる¹³⁾。

さて、小稿で粗描した青少年像に基づいて彼らの自我意識について一般化してみると、二つのことが言えると思う。(1) 現在の青少年のアイデンティティは社会的に不安定¹⁴⁾なものだということ、(2) もしも自我意識には拠点が存在するならば、その拠点は青年文化にあると考えたい。

幼い頃からの成長過程をみると、ある一定の社会に生まれた幼児は、その社会の諸々の現実を内面化しながら、自らの発達を方向づけて自分自身に意味を付与する。このように、人間は外界から存在の意味を吸収するので、元来不安定な存在だといえる。ところで、既に言及したように、幼児期と児童期において内面化した事柄に対して疑問が起こらない。従って、その時期に、心理的にも正常な自我が成立するならば、児童期のアイデンティティは安定するはずである。前近代的社会においては、第二次的社会化が第一次的社会化と同じように展開するので、現代と比べると、相対的にしっかりした自我意識の確立が期待できたのである。

現代社会において同じく不安の少ない自我意識の持ち主は、多分教育過程と将来の計画が順調に進み、友人に恵まれた青少年たちであろう。青年期が長いだけに、教育とライフ・プランに迷いや問題が起こるならば、自我意識もおのずと不確実になる。もしこういったトラブルに直面する生徒たちが正常に成長するならば、それはスポーツや他の遊びに没頭し、休みなどを楽しむということに負うところが多いと思われる。社会学的にいうと、彼らは青年文化に拠点を置いており、それに自我の支えを求める。家庭と学外で大人との触れ合いが少なく、圧倒

的に多い同世代との接触も関係するかも知れない。間接的ではあるが、頻繁に触れ合うのはテレビの若物たちである。青少年は、仮に若い歌手やスターのファンになっても、そこから現在の学習行為への動機づけのような積極的な影響を受けない。また、ファンであっても、自分が芸能界に入りたいという僅かの人以外は、憧れるアイドル歌手個人を尊敬し、行為のモデルにすることはしないと思われる。行為のモデルとしての影響も、日常生活に役立つ動機づけの影響もなければ、ファンとしての意味は一体何なのか。それは一個人としてのアイドルではなく、むしろ「若い世代」あるいはそのイメージとの同一化ではないかと思う。同世代のタレントや歌手は若さを売りものにし、非常に元気がよく、十代ないし二十代の若者にしかできない、若さにあふれる芸能活動を提供してくれる。そして、それが青少年の関心の対象になる。歌は単なる歌ではない。ヤングの歌手たちはきばつな衣裳を着て、フリー・ダンスのような身振り手振りで非常にダイナミックな表現力をもって歌い、一口にいうと、若さそのものを演じている。歌手自身ではなく、彼らの格好の良い仕ぐさやスタイルが憧れの的になる。真似できるのは、時々のはやりことば、ヘヤスタイル、洋服程度である。つまり祭日に街頭で出くわす青少年たちにみられるのはこのようなものである。休日の青少年のスタイルは彼らの集合的アイデンティティと結びついている。このように現代の青年文化は、おちこぼれそうな生徒には救済としての意味をもたらす他方、それに埋没してしまう危険性も含んでいる。

現在の青少年たちは恵まれた時代に生き、伝統的社会の若者と比べると、大いに青春をエンジョイすることができる。しかし、彼らがおかれている状態は実は厳しい。今の時代は新しい

時代である。ジェネレーション・ギャップははじめて生じた訳ではないが、上述の社会的距離とぼう大な青年文化の存在のために史上最大の幅に広がっていると考えられる。

〔注〕

- 1) 場知賀礼文「現代社会と逸脱行為について」『佛教大学社会学研究所紀要』第3号, 1982. pp. 58-65
- 2) P. L. バーガー・B. バーガー・H. ケルナー, 『故郷喪失者たち』, 新曜社, 昭和52年, 11頁
- 3) P. L. バーガー, T. ルックマン『日常世界の構成』新曜社, 昭和52年, 「制度化は習慣化された行為が行為者のタイプによって相互に類型化されるとき, 常に発生する」93頁。この「相互の類型化」は明らかに意識の次元を指す。
- 4) 「何を」と「どのように」意識するということはバーガーの「知識の構造」と「認知スタイル」に相当する。P. L. バーガー, B. バーガー, 前掲書14頁を参照。
- 5) 心理学で研究されたように, 正常な発達を妨げる不信の態度が三つある。すなわち, (1)自分のみ (2)他者のみ, (3)両者に対してである。T. H. ハリス『I'M OK, YOU'RE OK—人間関係が生きかえる』グヤモンド社, 昭和46年を参照。
- 6) E. H. Erikson, *Childhood and Society*, W. W. Norton, (1950) 1963, p. 247.
- 7) 伝統的社会における青年期については, P. L. バーガー, B. バーガー 前掲書, 224-5頁を参照。
- 8) P. L. バーガー, T. ルックマン 前掲書, 222-3頁。
- 9) 前掲書, 225頁。
- 10) 前掲書, 233-4頁。
- 11) P. L. バーガー, B. バーガー前掲書, 81頁。
- 12) 前掲書, 85頁。さらに, 次の定義を参考にした。 「アイデンティティとは, 個人と社会との弁証法にその源を持つ現象である」。同上, 296頁。
- 13) 完全に共通の意識はもちろんありえない。同じ家庭に生まれた兄弟の場合でも, 性格が異なるのみならず, 同一の家庭での育ち方も各個人によって異なっている。しかし, 兄弟の意識には共通点が見られるように, 類似した社会関係をもつ個人の意識にも共通の特徴が期待できよう。
- 14) 「心理的不安」と「社会的不安」を区別する必要がある。心理的不安は, 言及したように, 自我発達に生じうる内的不安, すなわち, 人への信頼と自分に対する自信の不足であるのに対して, 社会的不安は社会における位置に起こる問題を指す。